

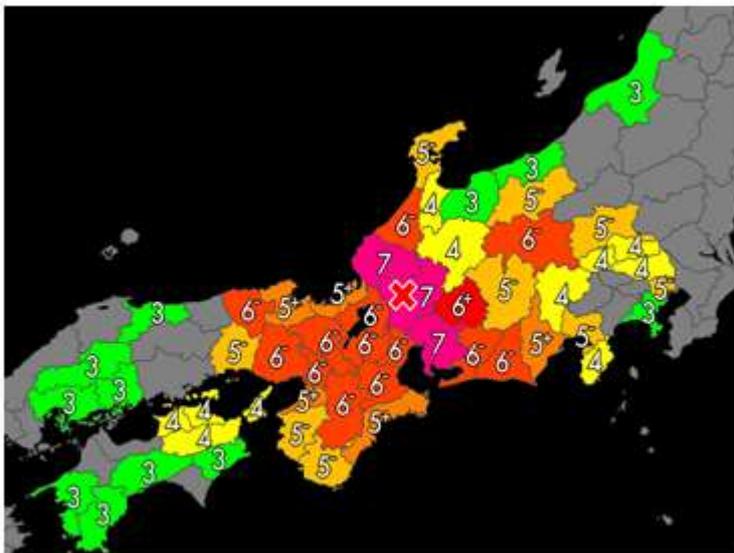
陶町歴史ロマン 24

18、陶町と災害

明治以前に陶町が大災害にあった記録はないが、記録がないだけで少なからず災害はあったはずである。慶応2年（1866年）の明知騒動の発端となった台風は、時の主産業である農業に大打撃を与えたが、災害の詳細は不明である。ここでは、記録の残る明治以降の災害について述べることにする。

(1)濃尾地震（明治24年 1891年）

明治24年（1891）10月28日午前6時37分、岐阜県美濃地方、愛知県尾張地方を突然猛烈な地震がおそった。最初は上下、水平方向への動きとともに、北、南へ揺れていたが、いきなり大きな烈震となり、岐阜地方気象台の地震計の針は振り切れてしまった。31日までの4日間に、烈震4回、強震40回、弱震660回、微震1回、鳴動15回、合計720回を数えた。その後も余震は絶えなかった。



濃尾地震時の各地の震度

震源地は本巣郡根尾谷（現本巣市根尾）。地震のエネルギーはマグニチュード8.0、世界でも最大級の内陸直下型地震であった。あの記憶に生々しい阪神・淡路大震災（1995年1月17日）がマグニチュード7.2、関東大震災（1923）が同じく7.9であったことを思うと、いかに大規模な地震であったかが分かる。

地震の及んだ範囲は西は九州全土に、東は東北地方にまで達した。中でも激震地域は岐阜県的美濃地方を中心に、愛知県尾張地方、滋賀県東部、福井県南部に及んだ。陶でも震度6強の激震に見舞われました。東濃地方は、遠隔にもかかわらず震源から延びる活断層上やその延長線上にあったため激震に襲われたのである。多治見や土岐では、死者こそ出なかったが、建物の被害や陶磁器の損害が大きかった。

地震の及んだ範囲は西は九州全土に、東は東北地方にまで達した。

死者は全国で 7,273 人、全壊・焼失家屋 142,000 戸という大きな被害をこうむった。これが濃尾大地震である。

曾根 100 年史では、その時の様子を「突然、不気味な鳴動を感じたと思うその瞬間、家も山も道も、世の中ひっくりかえるような大ゆれを感じた。みんな家を飛び出した。ひっきりなしにゆれが来る。そのゆれの合間を縫って窯場へ急ぐと、登り窯のうちのいくつかは、天井を落として、辺りは足の踏み場もない状態であった。夜になっても余震は続き、不安で家の中に入ることもできず、誰もが家の近くの空き地に、あるいは稲田の中にムシロを強いて不安な一夜を過ごした。」と、あります。

◇陶の窯業震災被害（「陶町史」による）

窯業数	窯数	窯室数	損害見積高	
猿爪	51 人	9 基	115 室	29,580 円
水上	24 人	9 基	62 室	11,275 円
大川	2 人	1 基	8 室	926 円

当地への県からの補助金は、道路補修・用水補修を中心に猿爪村 994 円、水上村 1,003 円、大川村 1,193 円であった。

しかし、この震災は恵那郡（陶）が土岐郡（多治見・土岐）より軽微であったことを幸いに大儲けした人もいたようである。園州居士の陶町史では「この震災は瀬戸または土岐郡地方こそ甚大で本郡は軽微に止まったので二ヶ月後には早くも復旧工事を完了し、他のまだ整備せざるに乘じて相場暴騰の潮流に掉さし昼夜兼行的に馬力をかけたので、禍は福となり中には以外の巨利を博したものがあつた。」と記している。

また、大川と小原の境にあり上の洞の奥にある通称「殿畑池（とのぼたいけ）」

（天正年間に小里氏の主従が森氏に追われ小原へ逃れる際にこの道を通つた。）にも、この池が「地震池」と呼ばれるようになった逸話があります。

濃尾地震の際、時の村長は「地震で殿畑の堤が切れ大被害を受けた。」（本当は、おそらく被害なし、あつても軽微）との報告を県へ出しました。間もなく県より役人が現地調査に来たそうです。すると村長は、落ち着いて「そうか」と呟くと、役人を案内して現地に



濃尾地震

明治24年(1891)10月、岐阜・愛知両県を襲ったマグニチュード8.0の大地震では、明治に入ってから建てられた洋風建築や施設物の被害が目立った。開通後まもない東海道線の長良川鉄橋は比較的長い中間の橋脚が破壊、崩れ落ちた。

向いました。村長は途中、役人の質問にわざとゆっくり答えると共に、回り道をして現地への到着時間を遅らせました。村長は役人が途中であきらめて引き返すよう仕向けたのです。案の定、役人からはぶつぶつ不平の声が聞こえ、やがて「今日は大事な会議があるから帰る。」と言って現地を見る事無く引き返したそうです。

村長はその言葉を待っていました。落ち着いたそぶりを見せていましたが、実際はヒヤヒヤしながらことを進めていたのでしょう。役場に帰着し、役人を見送るとしばらくは放心状態であったといえます。

村長の労？があつて、やがて補助金がおりに立派な堤ができたという。何事も徒歩の時代だからの話であつて、現在では絶対通用しない話です。

(2)昭和東南海地震（昭和 19 年 1944 年）

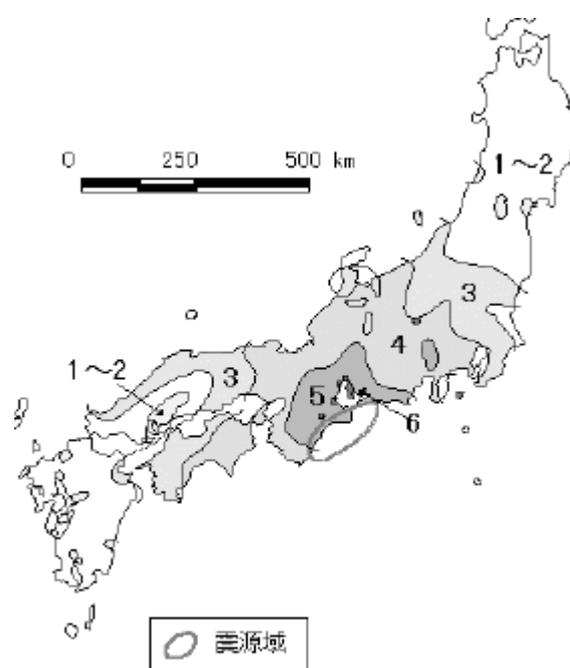
昭和東南海地震は、1944 年（昭和 19 年）12 月 7 日に午後 1 時 36 分から、紀伊半島東部の熊野灘、三重県尾鷲市沖約 20 km（北緯 33 度 8 分、東経 136 度 6 分）から浜名湖沖まで破壊が進行した（震源としては「熊野灘」）M7.9 のプレート境界型巨大地震である。

一般に死者・行方不明者数は 1223 名を数えたとされる大地震であるが、当時は太平洋戦争が重大な局面であり、報道は厳しく官制されていた（国民生活は際限なく切り下げられていった状況下、被災状況は人心を不安に陥れると極秘扱いにされた）なかでの地震でありその詳細は不明であるが、岐阜県でも死者 16 名・家屋全壊 406 棟・非住家全壊 459 棟の記録があります。

ただ、当時の報道を見てみると「岐阜合同新聞」（昭和 19 年 12 月 9 日付）の見出しに「生産は逆に上昇」とか「隣人愛で遅しく復旧」などと記されるように、当時の地震関係記事は人心の安定を図るよう配慮された。その他にも「火災全然なし、物言った日ごろの訓練（空襲に対する防火訓練）」といった調子である。

我が陶町でも「震度分布図」を見ると震度 4 程度の揺れはあつたはずだが、被害は全く不明である。

「曾根 100 年史」では、この震災で名古屋にある曾根化学窯業では工場が半壊に近い有様となり一切が操業中止の状態となった。なかでも最も被害の大きかった製土工場に対しては、軍部より「早急に復旧を」との指令と共に復旧物資の優先割当があり、昼夜兼行の突貫工事が進められていたが、米軍による空襲は絶え間なく行われ 12 月 22 日には名古屋



東南海地震の震度分布

市内各所に大火災を起こさせた。との記述があります。

(3)三河地震 (昭和 20 年 1945 年)

戦時下の 1945 年 (昭和 20 年) 1 月 13 日 3 時 38 分ごろに、マグニチュード M7.1 の大地震が三河地方に発生し大被害を与えた。

この地震は、前年の 12 月 7 日に発生した、東南海地震のわずか 37 日後に起こった。

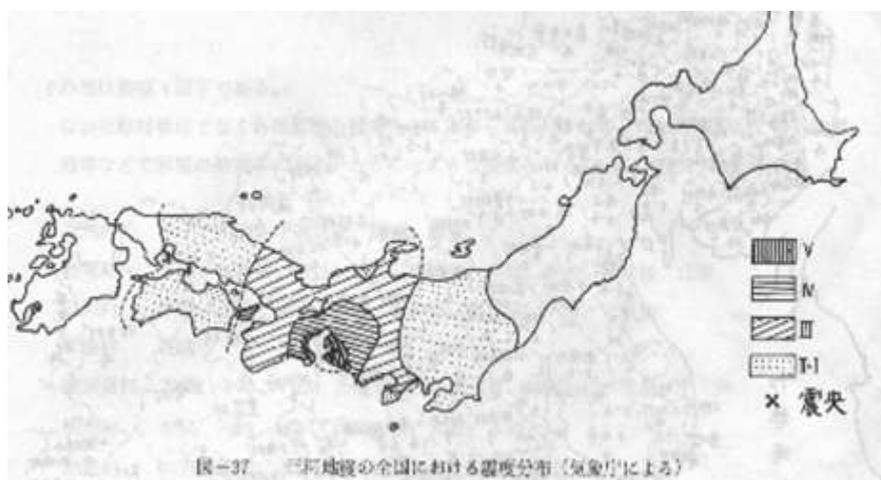
三河地震の前震は 2 日ほどからあり、音を伴った地震が多数あつが、戦時中であり、三ヶ根山方面に光が発生するのを見た人もいたため、アメリカ軍の爆撃だと思われていたようである。

この地震の被害は、死者 2,306 名、負傷者 3,866 名、住家全壊 7,221 戸、同半壊 16,555 戸、非住家全半壊 24,311 戸という。

死者が多数に上ったのは、全壊家屋が多かったためなのはもちろんであるが発震時が夜半で、ほとんど就寝中であつたからと思われる。

また 37 日前に発生した東南海地震で損傷した家屋を修繕する間も無く、三河地震が襲ったことも被害を大きくしたと思われる。

この地震も戦時中 (報道管制下) に起きた地震であるので、昭和東南海地震同様報道・記録が少なく被害の細部は不明である。



(4)南海道地震 (1946 年 昭和 21 年)

昭和 21 年 12 月 21 日午前 4 時 19 分、紀伊半島西南方の海上を震央とするマグニチュード 8.1 の第地震であつた。この地震は、奥羽地方の北部と北海道を除くほとんどの地域で有感観測され、関東大震災を上回る規模のものであつた。とくに強震であつたのは、和歌山・徳島・高知・三重・愛知・岐阜の各県である。被害は全体で、死傷者・行方不明 6,603 人、全半壊家屋 35,105 戸、焼失家屋 2,598 であつた。また、地震にともなう津波は、西は日向灘から東は東京湾にかけて発生した。この地震は、戦後の復興途上にあつた国民の物心両面に大きな衝撃を与えるものであつた。

また、「稲むらの火」として知られる「一人の老人が地震後、津波が襲ってくると予感し、収穫した大切な稲むらに火を放つと、山寺はこの火を見て早鐘をつき出すと、村人は「火

事だ。」と言って急いで山手へ駆け出した。その結果、多くの村人が津波から救われた。」という感動の物語を産んだ地震である。

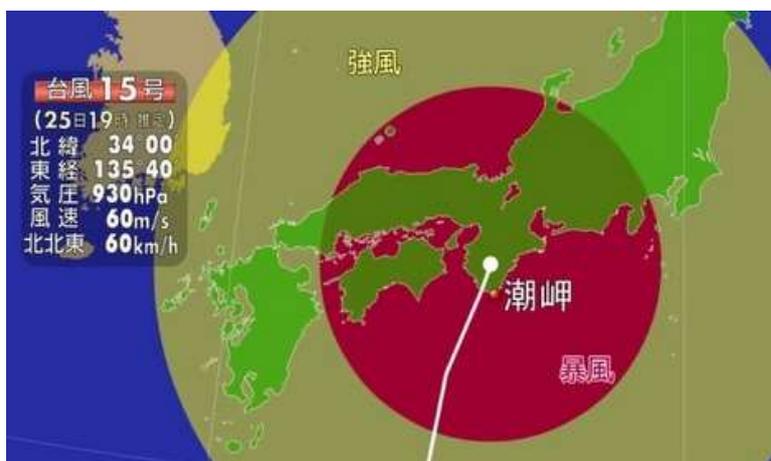
東濃地方でも被害があり 陶磁器の損害が約 400 万個にのぼった。恵那地方では、時計の振子が止まり、郡内一帯に停電したが人畜に影響はなかった。と、岐阜県災害史に記録されています。

前述の昭和東南海地震・三河地震・南海道地震は、陶でも少なからず被害があったと思われるが記録を見いだせず不明。あるいは、陶ではほとんど被害がなかったかもしれません。この辺りは地震には強い地盤かも？

いやいや、戦時中・あるいは直後のことであり、混乱の中で記録されていないだけであろう。

(5)伊勢湾台風 (1959年 昭和34年)

岐阜県が、台風翌年の昭和35年に作成した「岐阜県を襲った伊勢湾台風」によると、



●恐怖の三時間

昭和34年9月26日午後6時20分 超大型に発達した台風15号は、いささかの衰えもみせず、潮岬の西およそ15キロの地点に陸上した。岐阜県にはすでに不気味な風雨が吹きすさび、台風進路の右半圈に入った東海地方全域は、最悪の暴風圏にさらされた。

台風の中心は、奈良県の中部から三重県鈴鹿峠付近を通り、午後10時揖斐川上流に達したが、中心気圧は945ミリバール、平均風速は、32.5メートル（瞬間最大風速42.2メートル）を示し、風速30メートル以上の暴風圏は半径300～400キロにも及んだ。

台風はさらに平均時速65キロで北東に進み、岐阜県の中央を縦断して27日、0時45分、日本海へ抜けたが、台風の中心が通過する約3時間はうなりをたてた暴風とともに、時間雨量40～70ミリの激しい雨が降り続き、家屋の全、半壊と河川の溢水、氾濫による悲惨な災害が各地に続出、荒れ狂う台風15号は一夜にして岐阜県全土に猛威の爪あとを残した。その規模は台風史上最大といわれる室戸台風匹敵する超A級のものと観測され、「伊勢湾台風」と命名された。

明けて27日、県では、ただちに災害救助法を発動、ぼうぜん自失する被災者を励まし、全力をあげて災害の復興に立上ったが、次々と判明する被害は時間の経過とともに増大し、死者104名、家屋の全、半壊、破壊は23万戸、被害の総額は500億円にのぼり、県政史上

かってない大災害をもたらした。(※全国の被害合計は死者 4,697 人、行方不明者 401 人、負傷者 38,921 人)

●当時小学校 3 年生の私の記憶

夕方になると家の窓に板を打ち付ける父の姿がありました。その頃の我が家に雨戸はありません。子供の私にも台風への備えであることは分かりましたが、ただ台風がどんなもんかは知る由もありません。いつものように食事を終えると、いつものように寝入ってしまいました。

私の親は寝始めの私たち兄弟を起こすと、窓際の畳をめくりあげ、それを窓に押し当てて懸命に窓（掃出し窓）を押さえました。窓の隙間からは、容赦なく雨風が吹き込んできます。当時の私の家には、私たち兄弟 3 人の他に父母、祖父母、祖祖母、叔母の 9 人が住んでおり、両親、祖父、叔母の 4 人は、子供たちに「もし家が壊れたらこっちへ逃げて来い。わかったか。」と叫びながら、それぞれの窓を必死に押さええていました。子供たちは、家の中央でたった一つのろうそくの周りに集まり恐怖で声も出ません。

そのうち近所に住む親せきの親子が「親子だけではとても怖い。一緒にいさせて欲しい。」と、暴風雨の中を我が家にやって来ました。「来る途中、〇〇さんの家が壊れそうで、みんなでつかい棒を立てていた。」なんて話を聞くと、我が家は大丈夫かと子供心に不安になったことを覚えています。

台風が通り過ぎ、我が家は畳の濡れはあったものの何とか無事でした。安心したのか腹が空いた私たちは、玄関の土間で祖父のこぐ自転車の明かりでリンゴをむいてもらい食べたことを覚えています。

翌日、家を出ると、近所の田んぼは収穫前の稲穂がことごとく倒れ、そこら辺りにトタンや瓦・小枝・その他様々なものが多数散乱していました。陶の中にでも家が壊れたり、屋根が飛んでしまった家があったと聞いたように思います。

翌年になると、我が家の家の窓に雨戸が付きました。

数年後に社会見学などで名古屋へ行くと、電柱に「ここまで水につかった」との印があり（地上から 3m くらい?）、それを見るとその高さにびっくりしたことを覚えています。

(6)昭和 47 年 7 月豪雨 (1972 年 昭和 47 年)

岐阜県では、東濃地方はじめ県下各地で中小河川の氾濫、山崩れ、崖崩れ等が発生。明智町、瑞浪市で山崩れなどにより 27 名の方の尊い人命を失った。

この豪雨は通称「47 豪雨」と呼ばれている。

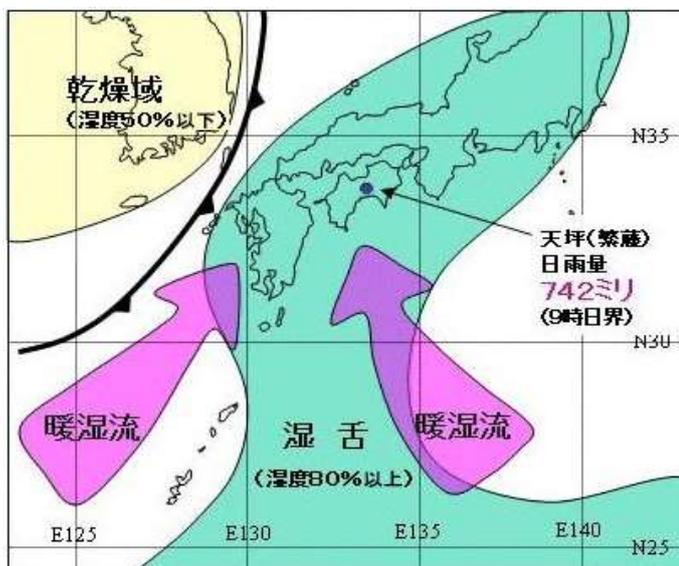
① 気象の概況

A. 気象経過

九州に大雨をもたらして、大きな災害を起こした梅雨前線は、7 月 7 日には北上して東北地方まで被害を拡大した。その後前線は再び南下して停滞。その影響は関東以西の全域

を覆いました。上層には冷気流が流れ、下層には南からの湿った暖かい気流が流入して、非常に不安定な気象状態となり、また南方洋上には台風6～8号も発生して活発な前線活動が続きました。このため、岐阜県には9日朝から雨が降りはじめ13日夜半まで断続的に降りつづき、そのうち、11日夜と12日夜半から13日未明にかけて県内に集中的に強雨が降り、特に後者の場合の東濃地方の被害は著しいものでした。

7月13日には、前日の23時頃に東濃地方に移動してきた厚い雨雲は3時頃までに1時間20～35ミリを超える強い雨を降らせ、このため恵那郡明智町、瑞浪市を中心に、多数の土砂崩れなどを誘発して、多くの死者を含む大災害をもたらした。この強雨は3時過ぎには弱まり始め雨は峠を越した。



B.異常気象の特性

ア 梅雨末期の前線活動による典型的な集中豪雨型の降雨であった。

イ 降雨は7月9日朝から13日夜までの長期にわたって断続し、県中部を中心に総雨量が、450ミリを超すところも多かった。

ウ この間の雨の降り方は夜間に強まり、日中弱まる傾向を繰り返した。特に11日の深夜と、12日夜半から13日未明にかけては、所により非常に強い降雨となった。

エ 11日深夜の降雨は、揖斐川・長良川・飛騨川の各上流域を中心とした県の中中部地域に集中した。

オ 12日夜半から13日未明にかけてのものは、降雨の中心が2地域に分かれ、1つは前夜と同じ県の中中部地域、他は東濃地方を中心として集中的に降った。東濃地方を襲った集中豪雨は多くの土砂崩れなどを誘発し、多数の尊い命を奪うなど、大きな災害をひき起こした。

② 東濃地方の災害状況

東濃地方では、土岐市の土岐川が氾濫して東濃鉄道駄知線の鉄橋が流される等の被害がありました。特に瑞浪市・明智町に被害が集中しました。

(東濃鉄道駄知線は復旧することなく廃線となってしまいました。)

◆瑞浪市報 2011・9・1号

昭和47年7月12日・13日に東濃地方を襲った集中豪雨。特に陶町方面では、12日の23時からわずかに3時間の間に、136ミリもの雨量を記録しました。

この豪雨により、瑞浪市内では、幼い子どもや活動中の消防団員を含む6名の尊い命が失われ、多くの負傷者や家屋・工場の損壊、橋の流出、道路・堤防の決壊、農地の荒廃など、たいへん大きな被害を受けました。



③ 対策本部の設置

岐阜県では、5時20分、災害対策本部を設置するとともに、明智町（5時30分）及び瑞浪市（9時）に災害救助法を適用することを決定しました。

（明智町では阿妻地区を中心にして瑞浪市より被害が甚大であった。）

瑞浪市でも渡辺市長を本部長とする災害対策本部が設置されました。陶地区の災害対策本部の班長に、現在陶町で活躍され、当時の市職員である臼井重喜さん、永井恒さん、河野瞭さんらの名前が見受けられます。

④ 陶町の被害

陶町の中でも水上・大川での被害が甚大で、特に大川では救助活動中の消防団員を含め、5人の方が亡くなっています。

私は、この当時は陶町に居なかったのですが、この豪雨に遭遇していませんが、テレビのニュースで陶町にも被害があることを知り、我が家の状況を知ろうと必死に電話をしましたが、電話が通じることはありませんでした。やっと電話連絡がとれたのは3日くらい後だったと記憶しています。

この災害は40数年前の事であり、この災害に遭遇、生々しく語る事ができる人は多いかと思います。



(7)陶町と防災

47 豪雨を経験した陶町では、過疎化が進んでいることも踏まえ、街づくり推進協議会が「防災と福祉の街づくり」を掲げ、会内にセーフティネット部会を設け防災活動に積極的に取り組んでいる。

その活動は、防災講演会・勉強会の開催・防災訓練・減災訓練の実施、様々な機会をとらえての啓蒙活動など、地域ぐるみ・学校ぐるみで取り組んでいる。

さらに、町内での災害想定に留まらず、東日本大震災での支援物資の送付・被害地訪問などにも及んでいる。

私たちの町 陶町も過疎化・高齢化が進み、残念ながら「災害に強い町」とは言いにくいですが、少なくとも過疎化・高齢化が同程度の町と比較したら「災害に強い町」であろう。